

ゴヤ「アスモデア」, 1820~23, プラド美術館 (マドリッド).

二〇〇五年はトリ(酉)年であるが、人やネコが近づいたり、行き止まりなどの困難・危険に出会ったとき、トリはフイと飛び立つ。これが、何とも羨ましい。ときたま夢で、恐ろしい物に追われて夢中で両手を拡げ、パタパタと扉を超え、家々の上を高く飛ぶことがある。しかし文字通り、「叶わぬ夢」である。その「叶わぬ夢」をそのまま絵にしたのが、ゴヤの「魔女アスモデア」(一八二〇~二三年)であった。地上では十九世紀初頭のナポレオン軍とスペイン人が、激しく戦っている。そのすぐ上を、アスモデアは眼を見開き、歯をむき出しにしながら、もう一人の美(魔)女とともに飛んでいく。行手に見えるのは、大きな岩山の上の、理想都市であった。

アスモデアの原型は、ベルシアのゾロアスター教聖典「アヴェスタ」に出てくる、肉欲と嵐と怒りの悪魔、アシュマ・ダエヴァである。これが旧約聖書外典『トビト書』(第七章、第八章)では、同じく淫欲の悪魔アスモデウス(男)となる。そして美女サラにとりつき、彼女の夫をつぎつぎと七人も新婚初夜に殺した挙句、八人目の夫トビアによって追い出される。魚(の肝臓と心臓)を焼く匂いによって、である。ヨーロッパ人が魚を焼く匂いを嫌うのは、自分のなかに悪魔を宿しているせいなのかも知れない。

もう一つ、十七世紀スペインの作家ゲバラが描いた悪魔は、マドリッドの家々の屋根を取り去る力があり、これもゴヤの空飛ぶ「アスモデア」に影響を与えたに違いない。空飛ぶといえは、ゾロアスター教の主神アフラ・マズダもまた翼を持つ、空飛ぶ人として描かれた。まさに元祖ウルトラマン、戦前派なら元祖黄金バットであり、ゴヤの空飛ぶ魔女と結び合う。

アフラ・マズダのアフラが、阿修羅に相当するという記述を、中村元先生編の『仏教語源散策』(東京書籍、一九七七年)に見出して、仰天した。阿修羅はサンスクリットのアスラの音訳であり、アスラは恐ろしい、強い神に用いられたとある(松濤誠達氏執筆)。この本を、新橋駅前広場の古本市で求めた。売価四百円の幸せは限りなく大きく、いつまでもニコニコであった。

文化の風景 (251)

木村尚三郎

ヒューマニズムと現代

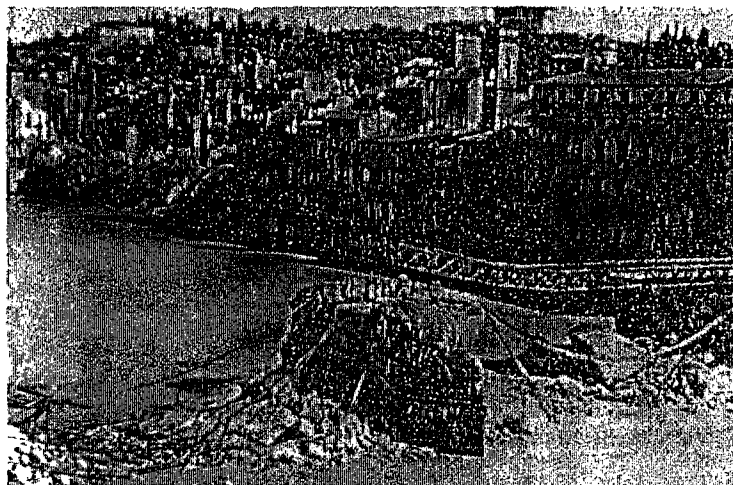
根占 献一

フィレンツェを一日中歩き回れる情熱と体力を保持していた時、リュックなりバッグなりに入れて携帯し、しばしば参照した書物は、米国美術史家イヴ・ポアスークの『フィレンツェ案内』(所持本は一九七九年第四刷)であった。それはコンパニオン・ガイド叢書の一冊で、題名を偽らず、わが手足になつてくれた。今は入手し難いが、伊訳版もあった。伊独仏にもこのような美術・観光案内を兼ねる歴史的都市シリーズの良質な書は多いものの、欧州大陸と陸続きではないアングロ・サクソン、アングロ・アメリカンのこの種の出版物にはまた独特の香りがある。さらに、だいたい後にそれよりもはるか以前の同類の手引き書を手し、愛着を感じているものがある。文学史家エドモンド・ガードナーの手になる『フィレンツェ物語』がそれで、当時の中世都市叢書の一冊を構成していた。初版は一九〇〇年、所持本は〇八年八刷、改版は一〇年に出ているようだ。こちらは荷物にならないほどの小型本であるが、持ち歩いたことはない。

九〇年代初め、ピッティ宮殿近くのパールでポアスークを卓上に置き、休憩を取っていた時のことである。辺りを見廻す余裕ができてみると、やや斜め真向かいの席に座る年配の紳士は、明らかにガードナー作と判る書を手元に置いていないではないか。これには少々

【創文】 472号/二〇〇五・一一

●文化の風景 251	空を飛ぶ	木村尚三郎	1
◆特集・著者は語る	ヒューマニズムと現代	根占 献一	
◆幕末期薩摩藩の農業と社会	余録	秀村 選三	6
◆軍産学複合体研究の現代的意義		畑野 勇	10
◆ハインツ・E・テート先生のこと		宮田 光雄	14
◆十六歳のアインシュタインの思考実験		細川 亮一	18
◆王羲之の臺		林田慎之助	22
◆色男業平の系図		大野 順一	26
◆〈故郷〉をうたう		菅 基久子	31
◆デルヴェニ出土のオルフェウス教の「神統記」		北嶋 美雪	35
◆ハイデッカー、その魔力の秘密		菊地 恵善	40
◆スピリチュアリズムの冒険		杉山 直樹	44
◆ディドロにおける時の流れ		井柳 美紀	48
◆滑りやすい坂に立たされる		橋本 努	52
◆境界線を越えるデモクラシーとその先に見えるもの		五野井郁夫	57
二〇〇五年図書目録		(表紙)串田光弘・曾我部ひとみ	



破壊されたサンタ・トリニタ橋の橋脚上に架設されようとしている鉄橋
ジョヴァンニ・スパドリーニ『フィレンツェ・一千年』(フィレンツェ、1978年)

驚いた。それとともに、愛書家を自認する者としては微笑ましく思ったが、この種の書としては、いくらこれまた世評高い書とはいえ、少々旧くなり過ぎていないか、と心配になった。

ところが、昨年(二〇〇四年)秋になって漸く知ったことには、なんと第二次世界大戦後も一九五三年に新版が出ていたのである。しかもこの新改訂版には、インターネットの古書情報によると、同大戦中にドイツによって齎された惨害を付加するとある。さらに五三年版は七一年にリヒテンシュタインで再刊されていることも、ナクシスのデータベースで確認できた。彼女の初版(一九六六年後も、彼の手堅い書は出版されていたことになる。あの時の客人がどの版を持っていたかは不明である。今、記憶の糸を辿ると、所持本のように古い感じがしないから、存外、戦後の版だったのかも知れない。

この二冊の案内書を比較考量することが小論のねらいではない。このような実用性を持った書籍にも時代の悲痛な体験が窺われ、ルネサンス・「ヒューマニズム」の理解に欠かせぬ原点が読み取れると言いたいのである。一八六九年生まれのガードナーは一九三五年に亡くなった。したがって、二度目の世界大戦が齎した想像を絶する惨状を知ることにはなかった。それ故に、戦後の版はどうしてもこのことに触れざるを得なかったであろう。ポッティチェリ研究で世界的名声を得た矢代幸雄は、『受胎告知』の再版序(一九五二

年四月二〇日)に再訪時の同年一月六日の文を収録して曰く、ポンテ・ヴェッキョを除いてアルノ川に架かる橋のほとんどが破壊され、サンタ・トリニタ橋も鉄の仮橋、と。確かにこのために、中世

以来そのままに架かり、最古の橋を誇ったサンタ・トリニタは、ポンテ・ヴェッキョにその席を譲ったのである。これより早く、戦争終結直後の一九四六年に製作された、ロベルト・ロッセリーニの名画の一本(戦火のかた)にはフィレンツェを舞台にした一挿話があり、そこには生々しい瓦礫の山が出てくる。矢代がじかに見たものもまだまだこれに近かったのだろうか。初めて映画でその場面を見た時、私にはとても信じ難いフィレンツェの光景があった。

物理的惨状はしかし、写真等である程度理解可能であるにしても、圧政に抗する市民や迫害されるユダヤ系学者を追想するにはある種 humanias を要する。フィレンツェ通のポアーストクは、サンタ・トリニタ橋が市民の熱情により元通りに再建されたと、先の自著に感動的に書いている。イタリア国民のなかにはファシズムを拒否し、ナチス・ドイツ軍による占領に抵抗し、住民殺戮に憤激した人が大勢いた。拙著『ロレンツォ・デ・メディチ—ルネサンス期フィレンツェ社会における個人の形成』(南窓社、一九九九年第二版)で、次のような文を書くために彼女の書物を利用している。「ファシズム時代のフィレンツェについて興味深い話がある。反フ

アシスト市民の一人が娘にレップブリカ(「共和政」の意の女性名詞)と名付けたが、登録を拒否された。このため、その子は、ファシスト政府倒壊まで名なしのままであった、と。」

文を書きながら、この時意識したのは歴史学者ハンス・パロンの理論であり、それは多分ポアーストクの脳裏にもあった。パロンの「市民的ヒューマニズム」論には、動乱と錯乱のなかにあってさえ、二〇世紀前半に至るまで持続されてきた、自由な共和主義的政治志向に寄せる熱い思いが流れている。レオナルド・ブルニが中央政府シニョリアの書記官長であった一五世紀前半のフィレンツェでは、その共和的姿勢がもの見事に貫徹し、ルネサンスは黄金期を迎えていたと目される。そのことは、今年二〇〇五年に前後二巻の初版刊行後、半世紀を迎える『初期イタリア・ルネサンスの危機—古典主義と専制政治との時代における市民的ヒューマニズムと共和主義的自由』で強調された。「市民的ヒューマニズム」という用語自体は、彼によるフリードリヒ・エンゲル・ヤノジ著『ルネサンスの社会問題』(一九二四)に関する書評が初出であり、ついでパロン自身が編纂したブルニの『人文学的・哲学的著作選』(一九二八)の序文で多用された。

だが、明確となったのはまさにその書『危機』であり、さらに一九六六年の全一巻の改訂版で決定的となった。一九七〇年には、バ

ロン理論に賛意を示したエウジェニオ・ガレンによる新シリーズ、「ルネサンス歴史叢書」の一冊としてイタリア語訳が出、作者は最終的な仕上げを行なった。ヤコブ・ブルクハルトが「イタリア・ルネサンスの文化」(一八六〇)のなかで専制的な支配者と超人的な個人の生き様を巧みに描写したのに対し、パロンは共和政国家における政治的ヒューマニストの自由観と彼らの文化創造力に高い評価を与えた。パロン理論の影響は第二の祖国となった米国で顕著であり、J・G・A・ポークックは「マキャヴェッリのモメント——フィレンツェの政治思想と大西洋の共和主義的伝統」(一九七五)の序で、これを率直に認めている。ここでは合衆国建国の父たちは市民的ヒューマニストの系譜と繋がる。

一九〇〇年ベルリン生まれのパロンはマイネッケに学び、若くしてトレルチの著作集を編纂する、ヴァイマル共和国の新進気鋭の研究者として登場する。宗教改革者には深い関心を寄せながら、二七年にはルネサンスの哲学者フィチーノとビーコについての重要な論文を発表した。だが、二九年から三三年までベルリン大学で教えたものの、ナチズムの脅威を前に三八年には渡米を余儀なくされた。イタリアなどでの蒐集史料はパウエル(ポール)・オスカー・クリステラーに託される。歴史家ヴァルター・ゲッツは生涯の師であり、両思想家に関する先の専門論文は六〇歳のゲッツに、そして『危

機』は、『著作選』が入った叢書の責任編集者だった師の八七歳を祝して献呈されている。

また、ギリシャ学者で文献学に秀でたヴェルナー・イエーガーは終生模範となった学者であった。『危機』と同年に出版した『一四〇〇年代初めにおけるフィレンツェとヴェネツィアの人文主義的・政治的文獻——批評と著述年代研究』はイエーガーに捧げられた。この先輩学者は第三のヒューマニズムということを打ち出し、それは古典古代の時代、ゲーテ、フンボルトの時代に継ぐヒューマニズムをヴァイマル共和国のドイツで迎えるものであった。だがパロンより早く米国に移住し、夢は潰れる。両者の精神的繋がり強かったとはいえ、アリストテレスの読みなどには学者としてのそれぞれの個性が出ているであろう。なぜなら、その形而上学からの影響色濃いトマス(1)の観想的な知性主義にイエーガーが惹かれたのに対し、パロンのほうは、アリストテレス倫理学からの発展たるキケロの行動的徳に活路を見出すブルーニ(2)に、歴史の転換を見たからである。社会行動をしないヴァイマルの研究者たちは、ブルーニ時代の頑迷な古典学者、フィレンツェ共和国のニコロ・ニコリと重なり合う。

しかし、一九〇五年に同じくベルリンで生まれ、一九三九年に同じく米国へ命からがら脱出する、先のクリステラーではヒューマニズム解釈が違っている。ナチスとの関係が知られているマルティ

ン・ハイデッガーは、ドイツの学生時代に親しく指導を受けた教授のひとりであった。ムッソリーニと個人的に話し合える間柄のジョヴァンニ・ジエンティレは、イタリア時代の彼の良き理解者であった。両親はホロコーストの犠牲となる。生い立ちや体験がヒューマニズム観を育むのでなく、このような悲劇的状況のなかでも生き続けるプラトン哲学の伝統に自らを託した。ヒューマニズムの特質は哲学と一線を画す、同じく古代以来の伝統であるレトリックにあり、それは中世では書簡作成術に見られるように変質を蒙りながら、ルネサンスに受け継がれる。ともにクリステラーが注目するのは文化の継続性である。未刊行の一次史料を探索しつつ、プラトン哲学者フィチーノとヒューマニズム文化の研究が終生、弛みなく敢行される。彼は言う、「私は哲学概論ではプラトンとカントに賛意を示すが、歴史家としては抽象観念や一般論よりも原文と細目に信を置く。私はひとつの大胆で包括的見解が、たつたひとつの文書によっていかに論駁されるかを一再ならず見てきた。そこで私は爾来このような陥りやすい過失を避けるように努めてきた」と。

ヒューマニスト *umanista* の初出がルネサンス期のイタリアにあっても、ヒューマニズム *Humanismus* の学術的用法は一九世紀初頭のドイツから始まる。以後、イタリア・ルネサンス研究は、本国は別にしてドイツ語圏で特に盛んであり、パロンとクリステラーが

その出身者であるのは自然なように思われる。兩人とも長命を保ち、米国をルネサンス研究の一大中心地にした。ただしパロン理論には生前から批判も多く、今後どのような命脈を保つか、予断を許さない。少なくとも、その理論は地域が限定されている。また、史料重視で客観的なヒューマニズム論に見えるクリステラーの解釈にも、「バイディア」の根源を古典ギリシャに見出してドイツがこれを受け継ぐという意識と、ハイデッガー同様にイタリア・ルネサンスをローマ精神 *Romanitas* の復活に限定する傾向とが見られる。それゆえ今後問題になる恐れがある。

「ヒューマニズム」問題はいずれにせよ、二一世紀でも決して古くならず、ルネサンス都市フィレンツェがある限り、優れた案内書同様に生き続けよう。

- (1) R. Fubini, *Una carriera di storico del Rinascimento in id, L'umanesimo italiano e i suoi storici. Origini rinascimentali-critica moderna*, Milano, 2001, 277-316. 特 299.
 - (2) K. Schiller, *Gebirte Gegenwärtigen: Über humanistische Leitbilder in 20. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 2000.
 - (3) 詳細は小論「ルネサンス・ヒューマニズム考」、『ノタリフ学会誌』三三(一九八四)一〇五-一二八頁、特 一一四頁注七参照。
 - (4) Ch. S. Celenza, *The Lost Italian Renaissance. Humanists, Historians, and Latin's Legacy*, Baltimore/London, 2004, 51.
- (おじめけんいち 学習院女子大学国際文化交流学部教授/ルネサンス史学専攻)